

お天気選挙

和光高等学校 二年 中村 汎森
なかむら ほん

時は二一〇〇年、今この世界に天気予報はない。とある天才科学者ボブが便利な世の中にするべく、作り出した「お天気選挙」により各国の天候が決まることになったからだ。「お天気選挙」とは前日の夜二十三時五十九分までに次の日の天気を投票して、その国民の投票数で決まるシステムとなっている。

これにより日本では暑い夏に雨や雪が降ることがしょっちゅうである。また、運動会や遠足シーズンには雨が降らなくなり、天候による予定の遅延がなくなってきており、うまく便利に活用できているのだ。

しかし、今、海外ではこの「お天気選挙」をめぐり、紛争が起きているのだ。それは地球上で降る雨の量は変えられないことが原因だ。人口が多い地域が都合よく雨を降らせることで、人口が少ない国は雨が極端に降らなくなってしまったり、その逆も起こっている。

中国では西北部側の砂漠化がかなり深刻となっていたことから、ここ数年は雨を多く降らせている。しかし隣国の河川流域は必要のない雨に長年巻き込まれ、洪水が頻発しているのだ。隣国の住民は怒りを顕にしている。また豊かな国が貧しい国から投票権を購入していることも問題になっている。

科学がどんなに進んでも、「共に生きる」という意識がないと解決できない問題は新たに発生してしまう。いつになったら世界は快晴になるのだろうか。

全世界が明るく晴れるまでボブの研究は続くのであった。

審査員講評 *****

お天気の選挙というファンタジーなシステムを使いながら、とても本質的なことが語られていると思いました。いろんな読み方ができる「いつになったら世界は快晴になるのだろうか」と

審査員賞
中村汎森「お天気選挙」

いう一行が心に刺さります。文体や言葉選びが内容にフィットしているのも素晴らしいです。

— 藤岡
みなみ